

# 渋江抽斎 (晩年の充実感)

「あなた、無意識に口ずさんでいるわよ」と荊妻が言う。

君のゆく道は 果てしなく遠い

だのになぜ 歯を食いしばり

君はゆくのか そんなにしてまで

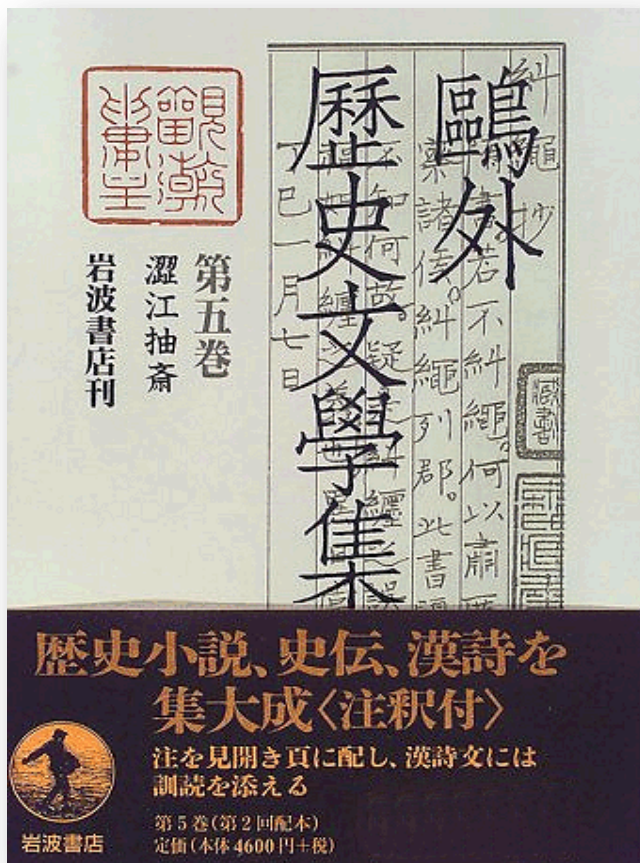
すなわち「若者たち」の歌である。若年時の道の選択は、古稀になつて振り返ると、すべて偶然に思えてきます。いろんな「未知の道」が縦横にあるのだが、「えいや〜」と決めなくてはならない。シュトルムやマン、「みずうみ」や「魔の山」に閉じ込められたらドイツ語を選んだかもしれない。

川西政明の『小説の終焉』(岩波新書)を読んだのが二〇〇四年、平成一六年、すなわち小生五十二歳のとき。以来、小説を読むこと激減しました。ゆく道は距離から時間に変わり、それは長くはないのである。高校時代、仲間たちと神田の古本屋街をブラブラして本の最後を開くと、●蔵書の印が押されている本がある。そうすると持ち主だった方の情熱が香り立つのである。

クニージニク村野さんが談話室「水源地」に、ウクライナ戦争に絡めて、「学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない」

# 粕谷 隆夫

という鷗外の言説を記しておりました。鷗外その人につきましては夷齋先生・石川淳の「前賢餘韻」で充分です。ただ自分に許された残軀と時間を考えますと、小説を、また歴史小説を止めたあとの鷗外の軌跡である史伝への興味が生れてきました。しかし「渋江抽斎」を何遍行ったり来たりして、意自ずから通ずると思っても、それは自分自身の精神の身丈を確かめることに終わるのですが……。



歴史小説のネタを探すためなのか、鷗外は江戸時代の「武鑑」を収集していたが、●蔵書と同じ役目の「弘前医官渋江氏蔵書記」という朱印にたびたび出会うのである。また上野の帝国図書館で目にした「江戸鑑図目録」という写本に、昔同じように武鑑を集めていた人物に気づき、それが「抽斎云」と記していた。渋江氏と抽斎が同じ人物でないかという好奇心に火が付き、探求が始まるのです。新聞小説として書かれたことが眼目ではないのか。資料を集め、迷路をさまよう。その一から始まり、その百十九で終わる。

## その六

外崎さんの答はきわめて明快であった。「抽斎というのは経籍訪古志を書いた渋江道純の号ですよ」

わたくしは釈然とした。

抽斎渋江道純は経史子集や医籍を渉猟して考証の書を著したばかりでなく、古武鑑や古江戸図をも蒐集してその考証のあとを手記しておいたのである。上野の図書館にある江戸鑑図目録はすなわち古武鑑古江戸図の訪古志である。ただ経史子集は世の重要視するところであるから、経籍訪古志は一の除承祖を得て公刊せられ、古武鑑や古江戸図は、わたくしどものごとき微力な好事家がたまたま一顧するに過ぎないから、その目録はわずかに存して人が識らずにいるのである。わたくしどもはそれが帝国図書館の保護を受けているのを、せめてもの僥倖としなくてはならない。

わたくしはまたこういうことを思った。抽斎は医者であった。そして官吏であった。そして経書や諸子のような哲学方面の書をも読み、歴史

をも読み、詩文集のような文芸方面の書をも読んだ。その迹がすこぶるわたくしと相似ている。ただその相ことなるところは、古今時を異にして、生の相及ばざるのみである。いや。そうではない。今一つ大きい差別がある。それは抽斎が哲学文芸において、考証家として樹立することを得るだけの地位に達していたのに、わたくしは雑駁なるジレットンチスムの境界を脱することが出来ない。わたくしは抽斎に視て忸怩たらざるを得ない。

抽斎はかつてわたくしと同じ道を歩いた人である。しかしその健脚はわたくしの比いではなかった。はるかにわたくしに優れた済勝の具を有していた。抽斎はわたくしのためには畏敬すべき人である。

しかるに奇とすべきは、その人が康衢通達（大通りの意）をばかり歩いていずに、往々徑（こみち）によって行くこともしたということである。抽斎は宋槩の経子をもとめたばかりでなく、古い武鑑や江戸図をももてあそんだ。もし抽斎がわたくしのコンタンポラン（同時代人）であったなら、二人の袖は横町の溝板の上で摩れ合ったはずである。ここにこの人とわたくしとの間に暈みが生ずる。わたくしは抽斎を親愛するこゝとが出来るのである。

わたくしはこう思う心の喜ばしさを外崎さんに告げた。そしてこれまで抽斎の何人なるかを知らずに、漫然抽斎のマニユスクライ（写本・草稿）の蔵弄者（所蔵者）たる渋江氏の事蹟を訪ね、そこにまず経籍訪古志を著した渋江道純の名を知り、その道純を識っていた人によって、道純の子孫の現存していることを聞き、ようよう今日道純と抽斎が同人であることを知ったという道行を語った。

外崎さんも事の奇なるに驚いて言った。「抽斎の子なら、わたくしは識っています」

「そうですか。長唄のお師匠さんだそうですね」

「いいえ。それは知りません。わたくしの知っているのは抽斎のあとを継いだ子で、保（たもつ）という人です」

「はあ。それでは渋江保という人が、抽斎の嗣子であったのですか。今保さんはどこに住んでいますか」

「さあ。大ぶ久しく逢いませんから、ちよつと住所がわかりかねます。しかし同郷人の中には知っているものがありましようから、近日聞き合わせて上げましよう」

まさに何が出て来るのかわからない道行なのである。結論ありきという方法は捨てられている。翌日の新聞を待っている当時の読者の緊張感が、今を生きている私たちに伝播する。文化、文政、天保と時は進む。幕末の群像が現れては霧の中に去っていくが、あまりにも知らない人が多い。その中で群を抜いて面白いのは抽斎の妻となる山内氏の五百（いお）の出現である。

### その百七

石川貞白は初めの名を磯野勝五郎といった。いつのことであったか、阿部家の武具係を勤めていた勝五郎の父は、同僚が主家の具足を質に入れたために、永の暇になった。そのとき勝五郎はかねて医師を伊沢榛軒に学んでいたのので、すぐに氏名を改めて剃髪し、医業をもって身を立てた。

貞白は渋江氏にも山内氏にも往来して、抽斎を識り五百（いお）を識っていた。弘化元年には五百の兄栄次郎が吉原の娼妓浜照のもとに通つて、ついにこれを娶るに至った。そのとき貞白は浜照が身受けの相談相

手となり、その仮親となることさえ諾したのである。当時兄の措置を喜ばなかった五百が、青眼をもって貞白を見なかったことは、想像するに余りがある。

ある日五百は使いをやつて貞白を招いた。貞白はおそろるおそろる日野屋の闕（敷居）をまたいだ。兄の非行を幫けているので、妹に謹められはせぬかと懼れたのである。

しかるに貞白を迎えた五百にはいつもの元気がなかった。「貞白さん、きようはお頼み申したいことがあつて、あなたをお招きいたしました」と言う、態度が例になく慇懃であった。

何事かと問えば、渋江さんの奥さんの亡くなったあとへ、自分を世話をしてはくれまいかと言う。貞白は事の意表に出でたのに驚いた。

これよりさき、日野屋では五百に婿（むこ）を取ろうという議があつて、貞白はこれをあずかり知っていた。婿に擬せられていたのは、上野広小路の呉服店伊藤松坂屋の通い番頭で、年は三十二三であった。栄次郎は妹が自分たち夫婦にあきたらぬのを見て、妹に婿を取つて日野屋の店を譲り、自分は浜照を連れて隠居しようとしたのである。

婿に擬せられている番頭某と五百となら、はたから見ても好配偶である。五百は二十九歳であるが、打ち見には二十四五にしか見えなかった。それに抽斎はもう四十歳に満ちている。貞白は五百の意の在るところを解するに苦しんだ。

そこで五百に問い質すと、五百はただ学問のある夫が持ちたいと答えた。その詞には道理がある。しかし貞白はまだ五百の意中を読み尽くすことが出来なかつた。

五百は貞白の気色を見て、こう言い足した。「わたくしは婿を取つてこの世帯を譲ってもらいたくはありません。それよりか渋江さんのところ

へ往って、あの方に日野屋の後見をしていただきたいと思ひます」

貞白は膝を拍った。「なるほどなるほど。そういうお考えですか。よろしい。一切わたくしが引き受けましょう」

貞白は実に五百の深慮遠謀に驚いた。五百の兄栄次郎も、姉安の夫宗右衛門も、聖堂に学んだ男である。もし五百が尋常の商人を夫としたら、五百の意志は山内氏にも長尾氏にも軽んぜられるであろう。これに反して五百が抽斎の妻となると、栄次郎も宗右衛門も五百の前に項（うなじ）を屈せなくてはならない。五百は里方のために謀って、労少くして功多きことを得るのである。かつ兄の当然持つておるべき身代を、妹として譲り受けるということは望ましいことではない。そうしておいては、兄の隠居が何事をしようと、これに嘴を容れることが出来ぬであろう。永久に兄を徳として、そのなすがままに任せていなくてはなるまい。五百はかくのごとき地位に身を置くことを欲せぬのである。五百は潔くこの家を去って渋江氏に適（ゆ）き、しかもその渋江氏の力を藉（か）りて、この家の上に監督を加えようとするのである。

貞白はすぐに抽斎を訪うて五百の願いを告げ、自分も詞を添えて抽斎を説き動かした。五百の婚嫁はかくのごとくにして成就したのである。

新聞小説であるからにして、一つの話が何回にもわたって続くことは少なく、適度な分量で物語は進行する。しかしコレラを虎列拉と書くことは知らなんだ。驚くことは簡単に抽斎の死を描くのである。「二十八日の夜丑の刻に、抽斎はついに絶息した。すなわち二十九日午前二時である。年は五十四歳であった。遺骸は谷中感応寺に葬られた」。このとき鷗外も五十四歳。何を感じたのか。面白いことは、主人公が亡くなったあとまでドラマが続き、それが意外と長いのである。ここに「史伝」の意

味合いがあるのかもしれない。死せる孔明と仲達か。

「その六十」「その六十一」は五百の名場面である。抽斎は晩年勤王に傾くがそれに反対する若き三人の侍の襲撃を受ける。（ただ抽斎は勤王家ではあつたが攘夷家ではなかつた）

このとき廊下に足音がせず、障子がすうつと開いた。主客はひとしく愕き見た。刀の柄に手をかけて立ち上がった三人の客を前に控えて、四畳半の端近く坐していた抽斎は、客から目を放さずに、障子のあいた口を斜めに見やつた。そして妻五百の異様な姿に驚いた。



五百はわずかに腰巻一つ身に着けたばかりの裸体であった。口には懐剣をくわえていた。そして鬨ぎわに身を屈めて、縁側に置いた小桶二つを両手に取り上げるところであった。小桶からは湯気が立ちのぼっている。縁側を戸口まで忍び寄って障子を開くとき、持って来た小桶を下に置いたのである。

五百は小桶を持ったまま、つと一間に踏み入って、夫を背にして立った。そして沸き返るあがり湯を盛った小桶を、右左の二人の客に投げつけ、くわえていた懐剣をとって鞘を払った。そして床の間を背にして立った一人の客を睨んで、「どろぼう」と一声叫んだ。

熱湯を浴びた二人が先に、柄に手をかけた刀をも抜かずに、座敷から縁側へ、縁側から庭へ逃げた。あとの一人も続いて逃げた。

五百は仲間や諸生の名を呼んで、「どろぼうどろぼう」という声をその間に挟んだ。

連載中に鷗外の母峰子が六十九歳で死去。また正式に陸軍省医務局長を辞している。母の死は哀しいとはいえ、正直、この人生上の二件の出来事は鷗外を身軽にしたのではないか。これは少なくとも七十歳の坂に達したわたくしも実感できません。『自由なる精神』を懐に、自分の世界を味わっている感が深い。それが文体によく現れています。鷗外の楽しみは、抽斎の師であった伊沢蘭軒に向かう。第二の史伝である。蘭軒は何者であったか。「わたくしは筆を行(や)るに当って事実を伝ふることを専にし、努て叙事の想像に涉ることを避けた。客観の上に立脚することを欲して、復主観を縦まゝにすることを欲せなかった」。このあくなき探求心の姿に、人生の晩年を迎えた読者も一緒に歩き、『晩年の充実感』を味わうのではないのか。

人生、最後の仕事。それは死を受け入れることにある。

### 山田風太郎『人間臨終図巻』

先生の顔色が益々よくなされました。コメカミのところを薔(ぜんまい)のように縮れた血管が怒張しているのが目に付いた。その日、突然先生が、総長(皇室博物館総長)室のいつものデスクに向かわれたまま、「僕の余命は幾干もない」と、静かな口調で言い出された。

私は息を呑んだ。五体が縛られたようになり、口が利けなかった。

「萎縮腎だ。これは死病で治療の方法がない」

そう言われてから、自分の指先でコメカミの血管をさされて、

「こうなったら、人間もおしまいだ」

そう言って、先生は例の目尻に皺を寄せて笑われた。

「医者には掛かっていない。掛かっても無駄なのだ」

(小島政二郎『森鷗外先生』)

「夜中に目の醒めたのを幸い、そのまま起きて『元号考』の稿を次ぐことにしている」と鷗外は言っている。また病気を直すものは、人間のヴァイタル・フォースだとも言っている。